

「バチが当たりました」

島根県 訂心寺住職 木村芳典

先日、お檀家さんからお尋ねがありました。お檀家さんは四十代。「命日から大分過ぎってしまったんですが、これからでも母の一周忌をして大丈夫でしょうか」と。私は「大丈夫ですよ。一周忌が遅れても、お母さんを思ってご供養をなさるんですから。きっと、お母さんは喜んで下さいますよ」とお答えし法事の日取りを決めました。

当日は、私とお檀家さんの二人だけでしたが、一緒にお経を唱え一周忌のご供養をしました。お勤めのあとお檀家さんがおっしゃいました。「和尚さん。昔、私の祖母が『亡くなった人の供養をせんとバチが当たるよ』と言っていたのを覚えているんですが、この度その意味が分かりました。私は本当に信心が無い人間なんです。今までも父の供養は、全て母任せでした。去年母が亡くなり葬儀はしましたけれど、正直言って一周忌をしなければいけないだろうか？。しなくても別にいいんじゃないか？祖母は「バチが当たる」と言っていたけれど、そんな事はないだろう？。くらいに 思っていました。

でも、命日が過ぎた頃からでしょうか。何故か無性に母の顔が浮かんで来るようになりましたね。そうすると不思議なもので『本当に何もしないで良かったのかな…。我が子に供養してもらえない事を、母はどう思っているのだろうか』、そんな事を思うようになりました。そして、女手一つで 苦勞して育ててくれた母の恩を改めて思うと、生前はこれと言って恩返しが出来なかったけれども、供養をする事がその恩に報いる事になるんじゃないか…。やっぱり供養すべきだった…。と、今までの様に後悔の念が湧いて来ました。それからというもの、ずっとその思いに苛まれながら自分を責め、気が晴れない毎日を過ごすようになりました。それでその時やっと分かりました。『ああ、こうやって供養をしないでいると、後からこんなに心が苦しくなってしまう…。祖母が言っていた「バチが当たる」というのは、こういう意味だったんじゃないか…。』とお檀家さんはしみじみ話して下さいました。私は「なる程、そうだったんですか。思い直してお母さんの一周忌をして差し上げたのですね。あなたは決して信心の無い人ではありませんよ。本当は、ちゃんと信心を持っている人だと思います」と申し上げました。

お檀家さんは「もうバチが当たらない様に、来年の三回忌はちゃんとやります。それが、母へのせめてもの恩返しです」と少し照れながらおっしゃいました。